

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.15
2014年3月14日発行
鶴見大学文化財学会

駆け出し学芸員の時代を顧みて

小池 富雄

4月から文化財学科の教授として迎えていただいた。前職は名古屋の徳川美術館で学芸員として勤務していた。これからは学生諸君に、その経験を伝えたい。大学教員としては、今はまだ駆け出しであって、教室で教え導く仕事には慣れてはいない。学科の先輩教員の諸氏が、学生の名前と顔をよく認知しておられるには、敬服するばかりである。また個々人の性格や学問への姿勢、個人的な部分にもすっかりお見通しで、驚かされる。本学科では、教員から学生に細やかな指導がされており、押しつけではなく、学生自らが自律的に成長できるように見守る姿勢には、頭が下がる。学生すべてが違う個性と興味や持ち味があるはずだが、私といえば名前と顔が一致するもの、ほど遠いのが現状である。

24歳の時に徳川美術館で学芸員として勤務を始めた頃も、同様に「こんな状態でこれから勤め上げることができるだろうか」と懐疑的になったのを再び思い出した。あのころは、慣れないことばかり。展示替え作業は、おおむね6週間に5日間でめぐって来た。先輩が展示作品と展示構成を企画して、新米の私はその作業の補助をするのが主な任務だった。定時で展示作業は終了したが、貴重な文化財に触れた緊張のために、夕食も喉に通らず風呂にも入らず眠り込んだのが、幾度もあった。先輩たちも、駆け出しのころは緊張のあまり陶磁器を落として割った、または逆に刀剣で切り付けられる悪夢に悩まされた夜もあったと聞かされた。幸い36年間で、収蔵品を落として損傷させたのは幸運にも経験しなかった。この仕事では、やはり壊しはしまいか、落としはしないかなどの危険からの緊張を常に維持し続けるのが事故防止の必須条件だろう。

展示作業の前には、解説やキャプションなどの展示札の製作が一手に新人にゆだねられた。といっても書道家のアルバイト氏に作品名を美麗に揮毫してもらい、その脇に時代や世紀をゴム印で私が押し、さらにタイプライターで同様な英語の情報を打ち込む仕事を続けた。初めて触ったタイプライターは特別大きな活字の電動だった。英訳は、どの先輩も指導してくれず、館の新方針として館長から私が初めて命じられた。その少し前に米国で徳川美術館は巡回所蔵展を開催し、和英両用の表示を名古屋でも開

始する際に、英文キャプションを製作する人材が必要となり、私を雇用した最大の理由であったようだ。自慢をするわけではないが、採用にあたり応募者をまず30数名に書類選考でしぼり、さらに英語、古文、関係法規、作文など筆記試験と面接試験で2名に絞り、実際に1週間展示作業に参加して最後の1名に選ばれたのが私だった。展示作業期間中に3時になると皆で休憩して抹茶を飲む習慣が当時の徳川美術館にはあった。相方の考古学専攻のA君は抹茶茶碗を片手で持って飲み、私は作法も稽古もしてはいなかったが両手で持って飲んだのが、マナーが良いと評価されて採否の決定的な分かれ目になったと、後で聞かされた。就職後は、慌てて近所の茶の湯の師匠の家に数年通ったが、飽き性でもあり長くは継続しなかつた。

解説札の作成では、記載内容を先輩が指示する際に、前回展示とは違う名称、製作年代を命じることがしばしばあった。研究水準が進化したからではなく、その場の思い付きや伝承で付けていたからである。新しく製作する作業の手間を減らしたい理由から、私は先輩には古い解説札の再利用を勧めても、あちらは平気で変更を命じてくる。ときには、展示作業が終了してから、再度の作り直しを要請されてうんざりした。「鉄道の切符のように、その都度ボタンを押すと、印字されて、展示終了の時にはゴミ箱に捨てる」、そんなシステムができないだろうかと夢に描いていた。昭和62年、徳川美術館が26億円の官民財界からの寄付でリニューアルされたとき、夢を提案し、実現できた。市販品レベルの携帯電話もファックスもインターネットも無かった時代だった。数千万円もする「オフィスコンピュータ」と同レベルのパソコンが乗用車程度のコストで購入できる時代が始まっていた。私はPCよりも印字が美しい大型ワープロ機に惹かれたのだが、データベースの拡張性に期待してPCを選択した。当時、単票印字の最小サイズは官制はがきで、縦横書き混在は不可能だった。現在では、様々な材質・大きさ、曲面ですら印字は可能である。徳川美術館は、官制はがき寸法の解説札用紙を今も使用しており、この時の決断が四半世紀を経た現在も継続している。

文化財学会 春季大会・秋季シンポ関連報告

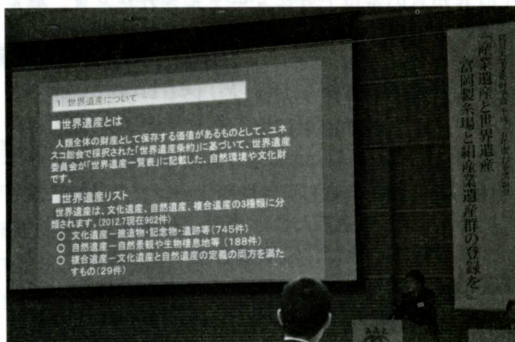
平成25年度春季大会

報告 3年 千崎 徹也
2年 佐々木歩美

平成25年度春季講演会は去る6月1日土曜日「産業遺産と世界遺産—富岡製糸場と絹産業遺産群の登録—」と題し、群馬県企画部世界遺産推進課課長の松浦利隆先生にご講演頂いた。

我が国における世界遺産登録に関する動きは「都合主義」による観点から、条約制定後約20年間は登録に着手しなかったが、その考えを改め（欧州における文化財保護の影響）法隆寺地域の仏教建造物・姫路城・屋久島・白神山地の登録を皮切りに、平成23年時点までに16の世界遺産（文化遺産12／自然遺産4）が存在している。

平成15年に発足した「富岡製糸場を世界遺産にする研究プロジェクト」により4年間の様々な活動を経る中で、平成18年11月「富岡製糸場と絹産業遺産群」提案書を文化庁に提出。平成19年1月に国の暫定一覧表に追加記載されることになった。更に5年後の平成24年7月には文化庁、8月には政府が推薦を了承、9月に政府がユネスコへ暫定版の推薦書を提出、翌年の平成25年1月には正式な推薦書を提出、ユネスコ諮問機関ICOMOSによる現地調査は8月から10月にかけて行われる。申請書はA4版紙で約2500枚にまとめられ、これは文化庁のホームページで閲覧が可能である。



現在の世界遺産の傾向としては、至高の遺産が重要視されているが、これだけでは歴史を語れないと松浦先生は述べる。「人類に関わりのあるモノを世界遺産に」その例としてアイアンブリッジ（英国シュロップシャー州にある世界初の鉄橋。正式名「コールブルックデール橋」）を挙げ、製鉄業の成功は産業革命に発展、それは即ち近代化の原点であること、西洋のスタイルは近代化の波として全世界に広まったこと、即ち歴史的背景の物語があることが世界遺産の価値であると述べられた。

富岡製糸場並びに絹産業遺産群の世界遺産登録における最大の強みは、日本の独自性を強く主張出来ることにあり、故に課題でもある。時は富国強兵の時代、資本を持たない民間に代わり政府が新しい産業の一つとして興した工場が富岡製糸場である。世界から器械製糸技術を学び製糸業の近代化が図られる中、原料繭の大量生産化や良質な絹を出す蚕の収穫時期の回数を増やすことに成功。その背景には荒船風穴（天然冷気を用いた蚕種貯蔵施設）高山社跡（「清温育」を開発した場であり、実習生の学び場）田島弥平旧宅（近代養蚕農家の原型）等の民間外部の協力・連携があった。第二次大戦後は、生糸生産の自動化に成功。自動繰糸機は全世界に輸出されたほか、日本の画期的な養蚕技術は世界中に広まることとなる。

富岡製糸場と絹産業遺産群における「技術の進化・交流」は世界の製糸産業発展、絹の大衆への浸透に大きな影響を及ぼした。富岡製糸場は当時とほとんど変わらぬ姿を見せており、建屋内部には和と洋の建築技術の粋を見ることが出来る。また、ここで働く「工女」と「女工」は両者全く別の意味を指しており、詳しくは『あゝ野麦峠』の原作を読んでもらいたいとして講演を結ばれた。

講演後は聴衆との質疑応答が行われた。

平成 25 年度秋季シンポジウム

報告 2年 佐々木歩美
 1年 二村 茜
 1年 山崎 嘉一



去る11月2日土曜日、本学会館にて「鶴見大学文化財学科の15年とこれから」と題し、以下の内容で開催された。

〈基調報告〉

- ・本学教授 石田千尋 「建学の精神と文化財学科の教育」
- 〈報告〉
- ・本学教授 河野真知郎 「文化財学科の構想時代」
- ・本学講師 星野玲子 「文化財学科の魅力」
- ・本学教授 小池富雄 「文化財学科の明日」
- 〈討論〉
- ・司会 本学准教授 宗基秀明

石田は文化財学科設立時に掲げた4つの教育方針とそれを実施するためのカリキュラム構成を、本学科設立にあたって計り知れない功績のあった大三輪龍彦、永田勝久、河野真知郎の3氏の名を挙げながら述べた。

1998年4月に設置された文化財学科は①「建学の精神に則り社会人としての広い教養の育成」②「多様な内容をもつ文化財に対する理解と幅広い視点」③「学外の社会にも目を向けた実習を中心とする実物教育」④「深い専門性と幅広い選択の可能性」の4項を教育方針とし、次のカリキュラムでその実践をはかるものとした。

まず「宗教学」、「日本語」、「体育」、「英語」を必修とする一方で、数多くの共通科目選択によって幅広い教養の取得を目指す。そして、専門性を高め、幅広い視点から文化財を見つめるための基礎概説として「文化財研究法」、「考古学」、「文化人類学」、「地理学」、「博物館概論」、「博物館経営論」、「歴史資料講読」の7科目を必修に定め、また多岐にわたる実習科目によって座学では終わらない実物・実地による実体験から文化財に立ち向かう姿勢を養えるようにした。さらに専門性を深め、学生の将来の進路や学的探求心を系統づける歴史・地理、考古・美術、文化財の3系列を専攻科目として設け、3年次からはじまる演習科目で文化財学科での学びを「卒業論文」に仕上げる。

1年次からの実習と専門科目の履修では、教員や学外文化財担当者など、多くの人々とのかわりを意識的に設け、常識を備えた人格形成と文化財に対する高い専門性からの取り組み姿勢が育まれる。そこに本学文

化財学科の目指す教育がある。

河野は2学科であった文学部が少子化による学生数減少に対応するため、当時履修者の多かった学芸員資格課程を基に魅力的な新学科の設立が検討されるなかで文化財学科の案が浮上したことを説明した。そのうえで、文化財学の専門知識と技術を学内の授業で充たでき、ほぼ全員が学芸員資格を取得可能なカリキュラム構成とした。なかでも集中・連続コマとした実習授業は実体験に基づいた学習が出来るものとして、学科の特徴を遺憾なく発揮する。とくに実習助手を配置したことは成功であったとする。

星野は文化財学科卒業生の視点から、本学の環境と魅力について述べた。文化財学科は一般教養科目と並行して初年次から行なわれる実物・実地、実体験を実践する実習科目において、最高の環境が整っているが、施設・設備を活用する学生自身が自己の意識と行動も含めて、高いスキルを求めて勉学に打ち込む必要性のあることを説いた。文化財学科は学生数が少なく、教員のきめ細かな指導を受けられることに強みがある。また、各実習科目で学生をサポートする助手職の存在を含めて学生と指導陣は非常に身近であり、学生は本学科の魅力であるこの恵まれた環境をより上手く活用すべきである。

小池は、文化財学科のユニークな特徴として実物実地に則して行う実習、文化財を学ぶにあたっての各専門科目等が充実していることを挙げ、それは幸せなことであると述べる。現在、小池が担当するゼミでは受託研究として、「黒漆十長生図螺鈿短冊箱」の分析並びに保存修復を行っている。今年度は本学歯学部との設備協力のもと、CTスキャンによる3次元立体映像による分析を行った。最新の分析機器を擁する本学歯学部との連携は、日本のトップ水準の分析を可能としたものであり、より高度な論文を書くことが可能である。本学科の課題としては、学科の知名度を上げるべく、本学の他学部・他学科はじめ、博物館や研究機関等の学外研究者は勿論、海外研究者との連携をより積極的にすすめるべきであるとの提案を投げかけた。

討論では、文化財学科卒業生や教員OBから在籍・在職時代の思い出と共に、今後の文化財学科のあるべき姿について、活発に意見がかわされた。

実習の感想

実習Ⅳ（国内）旅行記

石田 千尋

今年の実習Ⅳ（国内）は「外来文化の伝来とキリシタン」をテーマに8月25日より31日にかけて、長崎方面を6泊7日で巡った。参加学生は18名。引率教員は石田と小池先生。スペシャルゲストとして今年3月に定年退職された岩橋先生（現在、總持寺宝物殿館長）と大学院生1名の参加をえた。

古より対外交流の地であった今回の見学地はいまもなお異国情緒漂う土地柄であり、関東では味わうことのできない歴史と風土を満喫することができたと思われる。

7日間の行程は以下のようであった。

○8月25日<雨>

羽田空港→長崎空港→長崎港→福江港→ホテル（五島）

○8月26日<曇り時々晴れ>

ホテル（五島）→六角井・明人堂→堂崎天主堂→魚津ヶ崎公園（遣唐使船寄泊地の碑）→水ノ浦教会→高浜ビーチ→大宝寺→井持浦教会→大瀬崎→ホテル（五島）

○8月27日<晴れ>

ホテル（五島）→福江城（石田城）→鬼岳→明星院→福江港→長崎港→サント・ドミンゴ教会跡資料館→長崎歴史文化博物館→ホテル（長崎）

○8月28日<晴れ>

ホテル（長崎）→出島→大浦天主堂→グラバー園→長崎市べっ甲工芸館→二十六聖人記念館→稲佐山公園展望台→ホテル（長崎）

○8月29日<晴れのち曇り>

ホテル（長崎）→外海黒崎教会→遠藤周作文学館→出津教会→ドロ神父記念館→外海歴史民俗資料館→西海橋→海上自衛隊資料館（佐世保）→田平教会→旅館（平戸）

○8月30日<曇りのち大雨>

旅館（平戸）→平戸オランダ商館→生月島・島の館→ガスパル様→切支丹資料館（根獅子）→松浦史料博物館→旅館（平戸）

○8月31日<曇り>

旅館（平戸）→福岡市立博物館→太宰府天満宮→九州国立博物館→福岡空港→羽田空港

長崎市内で宿泊した27・28日の夜は希望者を募り20時よりナイトツアーにでかけた。27日は新地中華街→丸山・花月→寺町→眼鏡橋→長崎会所跡→諏訪神社→中町カトリック教会（大村藩蔵屋敷跡）→イエズス会本部・長崎奉行所西役所・海軍伝習所跡。28日は平和公園（平和祈念像・平和の泉）→如己堂・永井隆記念館→浦上天主堂→一本柱鳥居（山王神社）。

以上のように記すと些か巡検地が多いように感じるが、実際はかなりゆとりを持って行動できたと思われる。宿泊地には夕方5時前には着くことができ、休養も十分とれたことより日々の行動も効率よく、特に目立った故障も起きず無事巡検を終えることができた。残念だったことは、台風の影響で平戸・生月島の史跡を十分回ることができなかったことである。生月島のダンジク様や平戸のザビエル記念聖堂は今回のテーマにとって重要な見学地であったが大雨により諦めざるをえなかった。しかし、現在長崎県が世界遺産登録を目指している「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の多くを見て回ることができ、鉄川与助の手がけた西洋建築と和風建築の混ざり合った荘厳な教会群には目を見張るものがあった。



大浦天主堂前にて

〈実習Ⅳ・国外コース〉
インド仏跡巡礼を終えて

河野真知郎

実習先がインドになった理由をまず記す。鶴見大学は仏教系大学で、仏教史もある文化財学系なのに、今まで仏跡巡礼はなかったなあと思っていたが、前年秋の国外コース担当を決める学科会議で、「インドならやっても良い」と言ってしまったのが原因である。思えば約30年前の冬、仏跡巡礼ツアーに参加したことがあり、遺跡の保存修復や公開法にどんな変化があったのか、見てみたいという気分もあったのだ。学生さんの参加希望調査では不人気であろうとは予想していた。インドイコール腹下しという“常識”があるのだろう、最終的な参加学生は7名であった。引率教員は河野と緒方啓介先生の2人。

旅程と見学地は以下のとおり。

9月5日午後成田発、深夜デリー着。6日朝国内線でバトナへ。ナーランダの仏教大学遺跡見学。玄奘三蔵も住んだという煉瓦積みの僧院跡や大小のストゥーパはよく整備されている。ただし、欠損部をセメントで固めたり、雑草処理のインド的荒っぽさには変化なし。夕刻迫り霊鷲山、竹林精舎は部分見学のみ。バスにてブッタガヤへ移動。

7日ブッタガヤの大塔、釈迦成道の金剛座、アショカ石柱などを見学。夏前の爆破事件があり警備は厳重であった。のちスジャータ村のストゥーパを見学。午後ベナレスへ移動。

8日早朝にガンジス川のガート、火葬場などを見学。雨期の増水数メートルでガートは上段のみ。のちサルナート見学。鹿野苑はとくに変

化なく、ダーメク塔はまたしても修理工事中。博物館の柱頭獅子は圧巻。夕刻釈尊入滅の地クシナガラへ移動。

9日涅槃堂及びストゥーパ見学。のち陸路ネパールに入国し、釈迦誕生地ルンビニへ。世界遺産登録で“ルンビニ苑”として整備されたため、様相は一変。マヤ堂は発掘遺構を覆う覆屋にかわり、発掘されたMarker Stoneはアクリルで保護されている。インドへ再入国し、夜おそくスラヴァスティへ移動。

10日祇園精舎跡サハート・マヘート遺跡を見学。夜行列車にてアグラへ。早朝着。

11日仏跡巡礼の付け足しだが、アグラ城及びタージマハル見学。後者は大理石の劣化防止のため電気自動車に乗り換えて行く。地元のバイクやオートリクシヨの乗り入れなど、実効性は疑問。

12日新設の高速道路でデリーへ。クトゥップ・ミナル、国立博物館、フマユーン廟などを見学後、深夜空港へ。13日午後成田着、解散。

近年経済発展の著しいインド。アグラ・デリー間の高速道路脇にはF1のサーキットや新設大学が建設中。一方ローカル道路は維持管理が追いつかず路面の荒れがひどい。インド名物の停電も地方都市では健在。

文化財保護の面で遺跡の保存・修復・整備・公開は、戦前からの英国方式が踏襲され、かなり堅実である。1970年代からの世界遺産登録でも手硬いところを示している。今回の巡検テーマは巡礼であったが、釈尊の時代そのままではなく、後世の記念建造物を見たことになる。仏教史的理解だけではなく、のちのインド史と併せ考えなければならない。

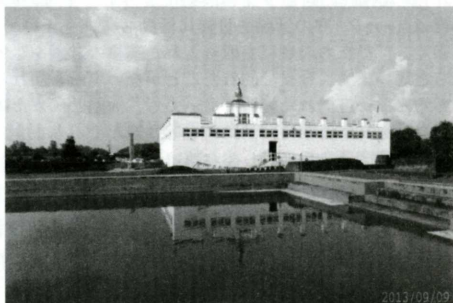


写真1：ルンビニのマヤ夫人堂と沐浴池。
左側はアショカ石柱。

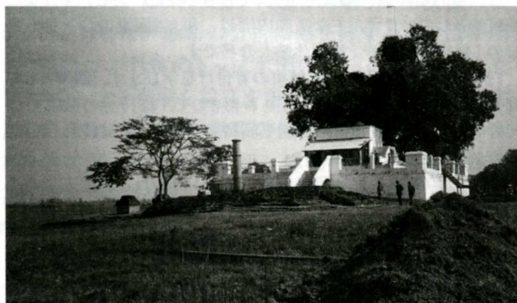


写真2：1984年12月当時のマヤ夫人堂。

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会では「歩くと歴史がみえてくる」をモットーに近世の江戸、近代以降の東京に関わる地域を対象とした巡検を中心に活動しています。

平成25年度は、6月30日(日)に行った第50回「のぼうの城—忍城巡検」、12月15日(日)に行った第51回「蘭学と海軍発祥の地—築地巡検」の活動となりました。

第50回巡検を行うにあたり、6月27日(木)の例会の際、忍城の歴史に関する解説と順路の最終確認を行いました。忍城は映画『のぼうの城』により一躍有名になった埼玉県行田市にある湿地帯を利用した成田氏の山城で、戦国時代豊臣軍の石田三成による水攻めに際しても落城する事なかった名城です。現在でも本丸の土塁跡や、石田三成が水攻めの為に建造した石田堤、さらに三階櫓も再建され、行田市郷土博物館として地域の歴史にふれる機会がありました。

第51回巡検の事前学習として12月12日(木)にレジュメを配付し基礎知識を蓄えました。築地にある蘭学事始の地は、豊前中津藩奥平家の下屋敷のあったところで、藩医で蘭学者の前野良沢らがオランダ語の医書ターヘル・アナトミアを初めて翻訳し、「解体新書」五巻を完成しました。当時の苦心の様子は、杉田玄白の「蘭学事始」にも詳しく書かれています。築地はまた、江戸・明治にかけて軍艦操練所としての側面も持っていました。江戸時代末期、江戸幕府は軍勢力増強を目的として築地に講武所を設け、後に操練所へは勝海舟が教授として赴任しました。明治維新の後、講武所跡は明治政府に接収され、太平洋戦争後に日本海軍が解散されるまで海軍用地として使用されていました。

今後とも部員の興味・関心を重視するとともに、活発な活動をしていきたいと思ひます。



古典芸能研究部会

私たち古典芸能研究部会は、古典芸能など、日本の伝統文化に直に触れる体験、鑑賞を通してそれらを身近に感じ、学ぶことを目的としています。主な活動内容は、年に2回夏の会・冬の会での「装束体験」や「雅楽体験」などです。

「装束体験」では、伝統装束の着付けを学びます。講師として東京成徳大学の青柳隆志先生をお招きして、總持寺の紫雲臺にて行います。これまでは、韓国王朝装束や甲冑・武家装束・直衣、平安装束などを行いました。

今年の夏の会では、「雅楽体験」を行いました。青木先生のほかに講師の先生を二人にご指導いただきました。楽器は「籠笛」「笙」「箏」の三種を体験しました。楽器初心者ばかりで音を出すのも一苦労でしたが、2時間程度の体験で越天楽のはじめの部分で合奏できるようになりました。籠笛の音色は舞い立ち昇る龍の声、笙は天から差し込む光、箏は地に在る人の声をそれぞれ表現しているといい、この3つの楽器を合わせて三管といいます。お寺で演奏したのでとても雰囲気が出て初心者の稚拙な演奏でもそれなりに恰好はついたと講師の先生に褒めてもらいました。ま

た、この体験を機に興味で笛を始めた参加者もいます。雅楽以外にも過去には三味線体験も行いました。

今年度は夏の会・冬の会以外にも晩秋の会と称して12月に「横浜狂言堂」を視に行きました。公演内容は狂言「鐘の音」「木掛置」でした。

研究部会の活動で、歴史はただ机に向かって勉強するものではないと身を以て知ることができました。今後は春と秋に能や狂言、歌舞伎鑑賞を、夏と冬に装束体験や雅楽体験を予定しています。興味を持たれた方はお気軽にご連絡ください。



宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、他の部会さんと比べて比較的新しい部会です。宗教関係をメインに博物館の見学や神社、お寺の巡検なども行っています。宗教に関係がなくても部員の要望があればそれにそった活動をおこなっていきます。

巡検に訪れる前には事前学習をして最低限の知識を得てから巡検を行います。

今年の活動で訪れた場所は明治神宮、国立科学博物館、大船観音寺「キャンドルナイト」の三ヶ所です。国立科学博物館では「グレートジャーニー展」という特別展を見学しました。

中でも大船観音寺の「キャンドルナイト」とは、観音寺にある広島県での原爆投下時の残り火をキャンドルに灯して世界の平和を祈るといふ行事です。この「キャンドルナイト」にはお手伝いとして参加させていただきました。私たちの仕事は、ステージの設営や受付、ろうそくを並べることや物品の販売の補助などの裏方のお手伝いをさせていただきました。お手伝いを通して様々な人との交流などをもてたことは、今後の活動の視野を広げていく上で、大変良い機会になりました。また、蛍光灯などの人工の光ではなくろうそくという自然な光はとても幻想的で温かみのあるもので、しばし見とれてしまいました。大船観音寺では「キャンドルナイト」の他にも「アジアフェスティバル」という行事も行われます。こちらは、アジアの人々や文化の交流が目的です。それぞれの文化にちなんだダンスや楽器の演奏を見ることが出来ました。

今年度の活動は3回と少ない活動になってしまったので、来年度は1ヶ月に1度の活動を目標に活動していきたいです。より多く、部員たちの意見を取り入れた巡検の計画をしていけたらと思います。今まで訪れたことがない場所を訪れるのはもちろん、一度訪れた場所であっても、前回とはまた違った新たな発見をするための活動にも取り組んでいきます。今後とも宗教研究部会をよろしくお願ひします。



美術工芸研究部会

今年度の美術研究部会の活動は1回のみとなり活動となりました。

今年度は6月30日に横浜で陶芸体験を行いました。参加人数は4人と少人数でしたが、ろくろを使用して湯のみ、マグカップ、小鉢など各々自由な作品を作りました。部員全員が陶芸は初めての体験でしたが、教室の先生の適切な指導もあり、製作した品物はしっかりと使える物に仕上がりました。

陶芸の過程として、最初に粘土で底を作ります。底は製作する品物により大きさが変わります。そして底を作った粘土に水を含ませて高さを作ります。ここで気を付けなければならないのは外側の形を気にしながら側面を作っていくのではなく、内側に気を付けながら側面を製作することです。内側の形を気を付けなければ完成した時に内側の粘土が厚くなってしまい、飲み物などを入れた時にあまり入らない湯飲みになってしまいます。したがって、陶芸において大切なことであると先生がおっしゃっていました。また、粘土が乾いてしまわないように、なるべく早く水分を含ませることも大切なことです。水分が足りなければ、製作した品物にヒビが入ってしまいます。したがって、陶芸において水分も大切な要素なのです。マグカップの取っ手や湯のみのみ切りは最後に作ります。取っ手は形を作り、接着します。糸切りはろくろを回しながらヘラのような物で作ります。そして色や文様を付け、焼いて完成です。焼く過程は教室にお任せし、製作してから2週間後に作品が完全完成となりました。

今回の陶芸教室は、難しい箇所は先生が手伝いをして下さったので全く経験のない初心者でも一つの作品を完成させることが出来て、参加しやすい授業料だったので来年も陶芸教室を予定しようと考えています。

今年度はこの1回のみとなり活動となりましたが、来年度は陶芸教室を始めとして美術館の巡検や、他の部会との合同の活動も考えています。部員の意見も尊重し、楽しく学べる部会にしていきたいです。



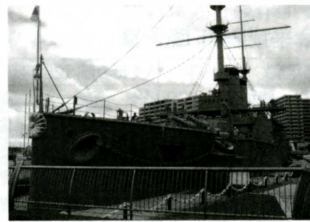
歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は、活動理念である「関東全域に目を向けた活動を基本理念とし、古代から中世を中心に歴史についてあらゆる方面からの研究を目指し活動を行う」を意識しています。

今年度は、部員の都合が中々つかず、去年より少ない活動となりましたが、5月と10月の計2回の巡検を行いました。また8月に京都へ旅行に行き、巡検を行いました。まず1回目の巡検は、5月26日(日)に神奈川県横須賀市にある三笠公園に見学に行きました。そこは日露戦争時に連合艦隊旗艦を務めた戦艦三笠が記念艦として保存されており、そこでは戦艦三笠の艦内見学でき、再現された艦橋に登ることができ、また艦内では日露戦争時などに関わる展示物や士官室・艦長室・長官室など充実した資料展示室などを見学することができました。次に2回目は、10月25日(金)に神奈川県横浜市の金沢区にある金沢文庫の特別展である「東大寺―鎌倉再建と華嚴興隆―」の見学に行きました。そこでは治承四年の南都焼討以降の再建事業を中心とする展示で、主に東大寺再建

に力を注いだ重源上人の像である「重源上人坐像」や、あの源頼朝の花押が観られる源頼朝書状(文治三年、文治四年)、快慶作の四天王立像などの貴重な資料が多く含まれていました。また8月の下旬に二泊三日で京都に旅行に行き、巡検を行いました。主に寺社巡りで、清水寺ではよくテレビや雑誌で見られる本堂の舞台から京都の町並みを見られることができ、金閣寺では、鏡湖地といわれる金閣寺の周りに広がっている池で金閣寺とその池に鏡のように映し出される光景は綺麗でした。また1000軀ものその迫力ある木造千手観音立像などで有名な三十三間堂などを見学に行きました。

来年度は、今年度よりもさらに活発な活動を行ってきたいと思っています。



うるし研究部会

うるし研究部会は2013年度春に発足した新しい部会です。漆を使った作品の制作や産地見学を通して、漆への理解を深めることを活動理念として掲げています。

前期の活動は、ナヤシとクロメ作業・名刺入れ制作・漆講座・産地見学などを行い、後期には箸制作・卒業制作展を行いました。ナヤシとクロメとは、採取した漆を塗料として扱いやすくするための精製工程です。この作業を6月4日～6日のお昼休みに6号館前で実施しました。精製した漆は、今後の作品制作などで部員たちが使用します。

夏休み期間中には、8月23日～25日の2泊3日の行程で茨城県奥久慈郡に産地見学の目的で漆を学びに行ってきました。奥久慈は漆の産地として岩手県浄法寺次に次ぐ、一大産地です。奥久慈ではうるし畑や工房の見学、漆掻き体験を通して漆への理解を深めることができました。また、漆管理組合の会長の方や職人さん等、漆工芸に関わっておられる方々のお話を伺うことができ、貴重な体験となりました。

名刺入れ制作では、ステンレス製の器胎表面に色・模様などを各自でデザインし、漆で装飾を施しました。完成した作品は大学会館にて開催された「うるし研究部会報告展示会」(9月10日～10月3日)で展示をし、多くの方に見ていただきました。また、この展示会場には漆産地見学での活動報告も合わせて展示しました。この作品展を通して、自分の作品を他の方に見ていただくことで達成感を得ることができ、より良い作品づくりへの課題も得ることができました。この名刺入れ制作に伴い、漆の技法や使用する道具について院生の先輩方による漆講座が開かれ、多くの部員が参加し熱心に漆技法(蒔絵・螺鈿)について学びました。

今年度の活動は初年度にも関わらず、とても充実した活動となりました。来年度はより多くの人に漆への興味を持っていただけるように、より活発に企画・活動を行っていききたいと思っています。



鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 研究部会活動
 - 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8. 本会の事務所は下記におく。

〒230-8501
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

付 平成11年10月16日から発足する。

付2 平成16年4月1日 一部改正

付3 平成23年4月1日 一部改正

編集後記

文化財学会報vol.15を刊行するにあたり、大変お世話になりました方々へ、この場をお借りして深く御礼申し上げます。文化財学会のさらなる発展と向上に貢献できるよう、今後も会報を通して学会の運営に尽力する所存です。（小野記）

文化財学会委員2年目で、副委員長と会報を兼任させていただいた。会報の仕事は率先して行えたが、副委員長の責務は十分に果たせなかった。しかし来年は3年目、学会運営の仕事と、会報の編集作業の役目も全うしたい。（田村記）

今年度も無事文化財学会報を刊行することができました。ご助力いただいた多くの方々に篤く御礼申し上げます。来年度も充実した内容の文化財学会報を刊行し、多くの方の手に取っていただけたら幸いです。（伊禮記）

平成26年度の年間行事予定

●春季講演会

日時 6月7日(土) 午後3時～
会場 鶴見大学会館メインホール (予定)
テーマ 「甲州金について」(仮)
講師 杏名貴彦 (山梨県立博物館学芸員)

●秋季シンポジウム

日時 11月1日(土) 午後1時～
会場 鶴見大学会館メインホール (予定)
テーマ 「仏教と仏像」(仮)

■お問い合わせ

045(580)8139 文化財学科 合同研究室

連絡先

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学 文化財学会
TEL:045(580)8139
URL:<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html>
E-mail:bunkazai@tsurumi-u.ac.jp